

## “退職のち 大学人は”

竹 中 淑 子

松岡勝男先生を知ったのは、もう半世紀も前の慶應義塾大学工学部管理工学科に於いてである。私をはじめて研究室をもった頃、松岡先生は隣の統計の研究室の学生で、私の研究室にも時々顔を出されていた。私は九州大学理学部数学科で、ベルマンのダイナミック・プログラミングやポントリヤーギンの最適制御論などを学んでいたが、この工学部では助手仲間とベルジュの本を輪講したのがきっかけで、当時は全くめづらしかったグラフ理論を研究課題とするようになっていた。後にグラフ理論の研究者はふえ数学の一分野となった。日本でもグラフ理論の国際学会が開かれ海外から多くの研究者が来日した。生涯論文千五百と言われるかのポール・エルデシュ博士の講演もあった。松岡先生はそれとは別に工学部が理工学部となり数理工学科が出来た頃から、小泉澄之教授の指導を受けてこれ博士課程はここで終えられ、一般調和解析の研究で理学博士を受領された。

その後、松岡先生は日本大学経済学部就職され、私も慶應義塾大学の経済学部に移った。その頃出版した共著「線形代数学Ⅰ・Ⅱ」（培風館）は両経済学部の初年度用テキストとして長い間使われた。

私は六十五才で定年退職し、かつてよりの望みであった“我がルーツ調べ”をはじめたのだが、そこで祖先の書いた漢文の文章や漢詩に出合い、まったく素養のないまゝ漢詩詠みにのめり込んでしまうことになった。この十数年の間には三冊の漢詩集も出版したし、いくつかの小さな賞もいただいた。

気が付けば、私の本棚では漢詩関係の本が増え数学の本を押しやってしまった。漢詩が数学を駆逐するとも言おうように。「悪貨は良貨を駆逐する」（グレシャムの法則）であるから、漢詩は悪貨ということか。

漢詩と言えば花蝶風月など四時の景を詠む優美や清雅の風趣に富むものであるのはもちろんであるが、詩経には「詩は志の之（ゆ）く所なり」ともある。私の詠んだ漢詩をみると、おもしろいことに数学に関する事象を詠んだものがいくつもある。「亡滅の顔出し」か。次にそれらの中から蕪詩を三首。数学的無限やツェノンの逆理に関するもの、研究者の心得を詠んだものなどである。

数学的無限

數學的無限

無限への願望 古今伝う  
 詩人 画家 幽玄に遊ぶ  
 誰の作ぞ 寓話 巴別の塔  
 耶蘇の聖堂 天に上らんと欲す  
 希臘の賢者 逆理を提す  
 模索の時空 解する能はずも  
 近代数学 開花に到れば  
 想い得たり 無限 手中に在るを  
 無限の階層 新たに栄を為す  
 現代の鬼才 鴻名を勒せば  
 論証 竟に及ぶ公理系  
 千古の概念 震驚に値う

無限願望古今傳  
 詩人畫家遊幽玄  
 誰作寓話巴別塔  
 耶蘇聖堂欲上天  
 希臘賢者提逆理  
 模索時空不能解  
 近代數學到開花  
 想得無限手中在  
 無限階層新爲榮  
 現代鬼才勒鴻名  
 論證竟及公理系  
 千古概念值震驚

(註) 希臘賢者＝ツエノン

現代鬼才＝カントール、ゲーテル、コーエン。

(七言古詩／換韻格、先韻、上声蟹韻、庚韻)

芝諾の逆理

芝諾逆理

聲譽斷続 今に至りて遺る  
 逆理の提要 何ぞ欺くを得ん  
 奇も曰う 飛弓 線を越える無く

聲譽斷續至今遺  
 逆理提要何得欺  
 奇曰飛弓無越線

亦た宣ぶ 脱兎 亀を凌ぐ莫しと  
 衆人一笑 無稽と見るも  
 知十三思 有理かと疑う  
 論証の起源 当に此に在るべし  
 深懐す 不朽の鬼才の辞

亦宣脱兎莫凌龜  
 衆人一笑無稽見  
 知十三思有理疑  
 論證起源當在此  
 深懷不朽鬼才辭

(註) ツエノン(BC四世紀)は連続、無限に関する四つの逆理(パラドックス)を

提唱。その中の二つが「飛ぶ矢は静止している」「アキレスは亀に追いつけない」。  
 現代数学の論証の基となったと言われる。

未来の科学者に寄す

寄未来之科学者

花を訪ね蝶を追う 野遊の児  
 幾歳螢窓 百卷の支え  
 遠く望む群星 永劫を思い  
 初めて聴く虚数 新詞に入る  
 英知欠くる有れば 詩人罔し  
 情緒無き時 学者危うし  
 孔聖の至言 窮理の戒  
 森羅万象 是れ 君が師

訪花追蝶野遊兒  
 幾歳螢窓百卷支  
 遠望群星思永劫  
 初聽虚數入新詞  
 英知有缺詩人罔  
 情緒無時學者危  
 孔聖至言窮理戒  
 森羅萬象是君師

(註) 孔聖至言「学而不思則罔 思而不学則殆」。

物事を学んでも自分でそれについて深く考えなければ本当の理解には到達せず、  
 物事を考えるだけで、それについて深く学ばなければ独断に陥って危険である。

(七言律詩／支韻)

さて、今は人生百年とも言われる時代である。大学人が退職ののちどのような過ごし方をするか、これは興味深いことである。私のように「数学は忘却の彼方」などと不埒なことを言う人は生まれで、おそらくは以前やり残した研究をなんとか続ける人が多いのだろう。私の友人達をみても研究を発展させる人、あるいはこれまでの研究をまとめる人がいる。生涯の研究テーマである経済史を著し世に問う一方、テノールのリサイタルを数回開くというまさに二刀流の親しいかつての同僚もいる。

このたび定年退職なされた松岡先生がいかなる退職ののちをすごされるか、楽しみにしているところである。

『漢詩の出典』

竹中淑子 『漢詩集 遙かなる星漢』 西田書店 2020年